

高野山靈宝館の設立過程に関する一考察

——「宝物館書類」を中心に——

梅 原 豪 一

1. はじめに

高野山内にある高野山靈宝館（以下、靈宝館）は、財団法人高野山文化財保存会が運営し、国宝、重要文化財、和歌山県指定文化財等を含む、約 50,000 点が収蔵されている博物館相当施設である。

靈宝館の設立過程を叙述した史料として『高野山靈宝館建設報告書』（以下、『報告書』）が挙げられる。これによって靈宝館設立に至った経緯や、建設趣意書、寄付者名簿と寄付額、さらに、建設費用などを確認することができる。『報告書』によって靈宝館の設立過程を略述すれば次のようになる。

明治 43 年（1910）1 月、財界人の根津嘉一郎（1860–1940）¹⁾ が高野山を訪れ、高野山重役から宝物館設立の希望を聞き大いに賛同した²⁾。これをきっかけに同年、根津は発起人を招集しはじめた。大正 3 年（1914）1 月に高野山宝物保存会が組織され本格的に事業が動き出し³⁾、大正 9 年（1920）9 月 30 日に建物を竣工し、大正 10 年（1921）3 月 1 日に仮開館となり、同年 5 月 15 日に靈宝館として正式な開館式を挙げて現在に至っている。

また、靈宝館所蔵史料の中に金剛峯寺編「宝物館書類」がある。その内容は宝物館（靈宝館）建設決議に関する書類を始め、建設趣意書の草案、実業家の書簡、電報送達紙など多種にわたる。『報告書』は「宝物館書類」の記録をもとに作成されたと考えられる。

本研究では明治期の高野山宝物を取り巻く状況と、それに対する人々の取り組みの一端を明らかにすることを目的とする。

2. 高野山宝物を取り巻く環境

明治に入り、高野山を取り巻く環境は大きく変化した。その中で、高野山内にある宝物もその影響を受けることとなる。すなわち、宝物は（1）経済的困窮に

(14) 高野山靈宝館の設立過程に関する一考察（梅 原）

よる流出の危機，(2) 火災による焼失の危機，(3) 盗難の危機に晒されていた。それぞれに例を挙げる。

(1) には，栗山藤作⁴⁾からの借入金の問題を挙げることができる。明治21年(1888)には栗山から金剛峯寺が負った負債が7万円となった。その対応策の1つとして，山内の宝物等を政府に預けて金銭を借用する案が出された⁵⁾。この時は幸いにも宝物が流出することはなかった。しかし，この他にも経済的困窮による宝物流出の危機は少なからずあった。

(2) には，明治21年(1888)の大火が挙げられる。高野山は3月23日から2日間に渡り大規模な火災に見舞われ，多くの寺院と宝物が灰燼に帰した。焼失した宝物は数多くあるが，その中で特に注目すべきものは絹本著色五大力菩薩像の内2幅である。現在，残りの3幅はいずれも国宝となっていることから，この被害がいかに大きなものであったか理解できる。

(3) には，明治32年(1899)4月5日に御影堂宝庫から多くの宝物が盗まれた事件が挙げられる⁶⁾。被害にあった宝物は，孝明天皇脇差，豊臣公太刀，飛行三鈷等，歴史的に大変重要なものであり，中でも飛行三鈷は当時国宝とされていた。後に犯人は逮捕され，飛行三鈷は無事に返還された。しかし，その他の宝物の中には，金具を取り外されてしまったものや，ひどい場合は，金塊にするため金具を溶かされてしまったものもあった。

3. 宝物保護の動き

以上のように，明治期は高野山宝物にとって波乱の時であった。しかし，宝物に対する意識にも変化が起こる。明治21年(1888)5月から9月にかけて，官命により，九鬼隆一(1850-1931)⁷⁾を筆頭とする調査団によって，近畿地方の古社寺宝物が調査される。この調査団にはフェノロサ(1853-1908)，岡倉天心(1863-1913)等が参加していた。調査団は高野山も訪れており，岡倉天心による高野山宝物の調査記録も残されている⁸⁾。先述した通り，この年高野山内は，火災によって多大の被害を被っていた。この火災の直後に調査を行ったという点は興味深い。このように明治期半ばを過ぎる頃には宝物保護に向けて積極的な動きがあった。そして明治30年(1897)には，古社寺保存法が制定され，宝物を保護しようというシステムが構築される。

さらに明治33年(1900)には，高野山興隆会が組織される。この組織は，「興隆会録事」によれば「当山を興隆する方法を講ずる」ための組織である。「学

徳修養の道，建造物の復興，宝物の保存法等」の事業が視野に入れられており，その目的の一つとして宝物館の設立が挙げられている⁹⁾。この時には具体的な設立に関する動きは見られなかったが，このように宝物館設立の構想は，設立が計画される10年前には既にあったことが確認できる。役員等の詳細は，靈宝館所蔵『興隆会会則』によって確認することができる¹⁰⁾。そして注目すべきは，この会則が「宝物館書類」に収録されていることである。しかし『報告書』には興隆会の記述がなく，現段階では興隆会と靈宝館設立の関係は不明であり，さらなる調査の必要性がある。

4. 「宝物館書類」にみる勧募活動の詳細

『報告書』には財界人達の尽力の様子を確認することができる。さらに「宝物館書類」には，『報告書』では確認できない詳細な記録も残されている。

例えば，大正3年（1914）4月12日に開催を予定されていた大師会に関する書類である。大師会とは，根津が高野山に紹介した益田孝（1847-1938）¹¹⁾が，明治29年（1896）3月21日に，前年に入手した狩野探幽旧蔵の弘法大師筆座右銘十六字一卷の披露を兼ねた茶会を，品川御殿山の自邸で催したことに端を発し，その後，恒例化した茶会である。財界人達が多く集まるこの茶会に，宝物館設立の勧募活動を行う目的で，宝物を展覧する計画が立てられる¹²⁾。

「宝物館書類」に含まれる，この件に関する書類には，「東上報告書」や「国宝出陳願」等がある。これらによって，どのような宝物が高野山から東京へ持ち出され，期間中に誰と会い，どのような事が起きたか等，『報告書』にはない詳細な情報を知ることができる。

この会のために高野山が用意した宝物は，国宝（古社寺保存法基準）7点である。その中には，弘法大師に所縁があるもの4点が含まれている。このことから高野山が如何にこの大師会に力を注ごうとしたかがわかる。

5. おわりに

本稿では靈宝館設立に至るまでの高野山宝物を取り巻く状況と，それに対する人々の取り組みの一部分を取り上げた。「宝物館書類」は，靈宝館設立に向けた真言宗高野派の動きに留まらず，文化財保存に果たした財界人の役割の一端を知ることができる貴重な史料である。今後，この史料の調査を進めることにより，文化財をめぐる当時の高野山と財界人との結びつきを明らかにしてゆきたい。

(16) 高野山霊宝館の設立過程に関する一考察 (梅 原)

- 1) 明治から昭和時代前期の実業家。没後、収集品をもとに根津美術館が設立された。
- 2) 高野山霊宝館 1921, pp. 2-3.
- 3) 高野山霊宝館 1921, pp. 5-6.
- 4) 奈良県五條の名士で、当時鉾山経営を行っていた。現在の金久商事株式会社。
- 5) 大山 1936, pp. 175-176.
- 6) 『高野教報』19号, pp. 29-32.
- 7) 政治家。明治30年(1897)の古社寺保存法制定にも関わっている。男爵。
- 8) 岡倉 1981.
- 9) 『高野教報』17号, pp. 42-43.
- 10) 総裁は、伏見宮邦家親王第8王子の小松宮彰仁親王(1846-1903)が就任し、渋沢栄一(1840-1931)や大隈重信(1838-1922)など、政財界の人物が多く所属していた。
- 11) 明治から昭和前期の実業家。三井財閥の発展に尽くした。男爵。
- 12) 高野山霊宝館 1921, p. 6.

〈参考文献〉

- 梅田義彦 1971『日本宗教制度史』東宣出版。
- 飯田國宏 2014「年表で知る、大師会の歴史」『なごみ——茶のある暮らし』6月号。淡交社, pp. 36-37.
- 大山公淳 1936「明治前期の高野山経済観」『密教研究』60号, 9月, pp. 160-184.
- 岡倉天心 1981「近畿宝物調査手録」『岡倉天心全集』8. 平凡社, pp. 47-77.
- 高野山霊宝館 1921『高野山霊宝館建設報告書』高野山金剛峰寺。
- 高野山霊宝館 2011『寶を護れ——大正時代の保存プロジェクト』高野山霊宝館。
- 高野町史編纂委員会 2009『高野町史近現代年表』高野町。
- 齋藤康彦 2012『近代数寄者のネットワーク——茶の湯を愛した実業家たち』思文閣出版。
- 高橋義雄(熊倉功夫・原田茂弘校注) 1991『大正茶道記』淡交社。
- 高橋義雄(熊倉功夫・原田茂弘校注) 1989『東都茶会記』淡交社。
- 高橋義雄 1986『萬象録』思文閣出版。
- 中村愿 2013『岡倉天心アルバム』中央公論美術出版。
- 日野西真定 1983『高野山古絵図集成』清栄社。
- 宮坂宥勝・小谷成男 1971「毛利清雅年譜」『密教研究』96号, 9月, pp. 24-35.
- 文部省 1972『学制百年史』帝国地方行政学会。
- 「興隆会創立せり」『高野教報』16号, 1899.1, pp. 42-44.
- 「興隆会録事」『高野教報』17号, 1899.2, pp. 42-44.
- 『高野教報』19号, 1899.4, pp. 29-32.

〈キーワード〉 高野山, 霊宝館, 国宝, 文化財, 大師会, 財界人

(高野山大学大学院)